

やまと隕石最初の収集個数は9個か11個か？

—ミステリーは9個で決着、2011年4月—

吉田 勝

ゴンドワナ地質環境研究所

発端

2011年4月5日、NASAはインターネットで、「歴史的やまと隕石第一号のYamato691隕石から日本人の中村圭子氏をリーダーとするNASAの研究グループが新鉱物Wassoniteを発見した」と報じた(NASA, 2011)。

この報告はたちまち、隕石を集めた当時の第十次日本南極観測隊内陸調査隊メンバーを中心として話題になり、いろいろな話が10次隊メールネット上で飛び交った。その間に、当時10次隊が集めた隕石は全部で9個だったのか、11個だったのかの話題がでてきた。Yoshida et al. (1971)では9個と報告しているが、吉田(2003)は“9個か11個かはミステリーで闇の中”としている。吉田(2003)の報告に収録されている発見当時のメモや、まとめられた図表をネタに、当時の直接の関係者だった成瀬、上田、吉田らの間でかなりつつこんだ議論が交わされた。3日間の議論の結果は、なるほど9個だったのだということで3者とも一致し、ほぼ納得した。

簡単に結論をまとめれば、11個とされた内の2個は上田と吉田が同じ2個の隕石をそれぞれに記録したもの、つまり重複記録だったのであろうとの結論である。もう少し詳しく述べると、1個は上田・吉田が共同で採取し、もうひとつは上田が採取して吉田に渡したものを、吉田が誤って吉田採取として記録し、一方上田はそれぞれについて採取時に記録していたので二重記録ができたということである。メールを介しての多くの議論の中で、上記の結論に至った主な発言を時系列で以下に記録する。発言の収録にあたっては、煩雑ないいまわしや、後に明らかな間違いとわかったところは著者の責任で訂正した。また、発言記録中の表の引用は本文の表番号に書き換えた。

なお、本稿は成瀬の発言「いずれ2003年報告の訂正として正式に報告されるだろうが、とりいそぎS10ホームページに簡単なとりまとめを——」(4月11日18:14)に触発されて、南極やまと隕石初発見こぼれ話し(吉田, 2003)の続編(訂正編)執筆を念頭に書き始めたものである。

S10メールネット上の発言記録

吉田(4月9日00:04、一部修正・加筆のうえ図を3部追加)

発見した隕石が9個だったか11個だったかについては、今は“闇の中”(吉田, 2003)というのが大体の理解とします。しかし、その後されに検証を重ね、2010年にPolar Science誌に書いた英文の報告「Discovery of the Yamato Meteorites in 1969」では次のように記しました。

Later, I had the chance to talk with Dr. K. Shuto (a former student of Prof. Gorai; see Fig. 1), who had taken the photographs of the nine meteorites in 1970. He clarified that there were only nine meteorites at that time. I then precisely re-plotted the discovery sites, referring to all the field data available at that time, and found the possibility that the locations of discoveries made by Ageta and Yoshida were duplicated. It is possible that on several occasions we were together in the same snow car in the field, found a meteorite(s) together, but made separate records of the discovery. In considering this possibility, I decided to delete my discovery location from the new map, as my original field notes regarding the location of meteorites, as used in previous reports (Yoshida et al., 1971; Yoshida, 2003), had become lost.

これは、大体以下のようなことです。

「その後さらに発見場所を検討してみると、上田君の採集として記録した隕石と、私が採集したとして記録した隕石の発見場所がどうやらダブっているらしく、これは多分私と上田君が同乗して一緒に発見し、別々に記録したのだらうと考え、私の記録の方を抹消した」との話です。

結局これが現在の私の最終結論となっています。つまり、やはり最初から9個だったのだらうというわ

けです。しかしこの話も、もっときっちりと検証しないと本当かどうかわかりませんが、まずはこんなところでピリオドとしようというわけです。なんともお恥ずかしい話ですが、隠すわけにはいきません。新しいマップもこの英文報告に付けました。ここでは2003年報告のNo. 4と5を抹消しています。以下に1971年、2003年と2010年に発表した隕石発見位置図を収録しました（図1、2、3）。

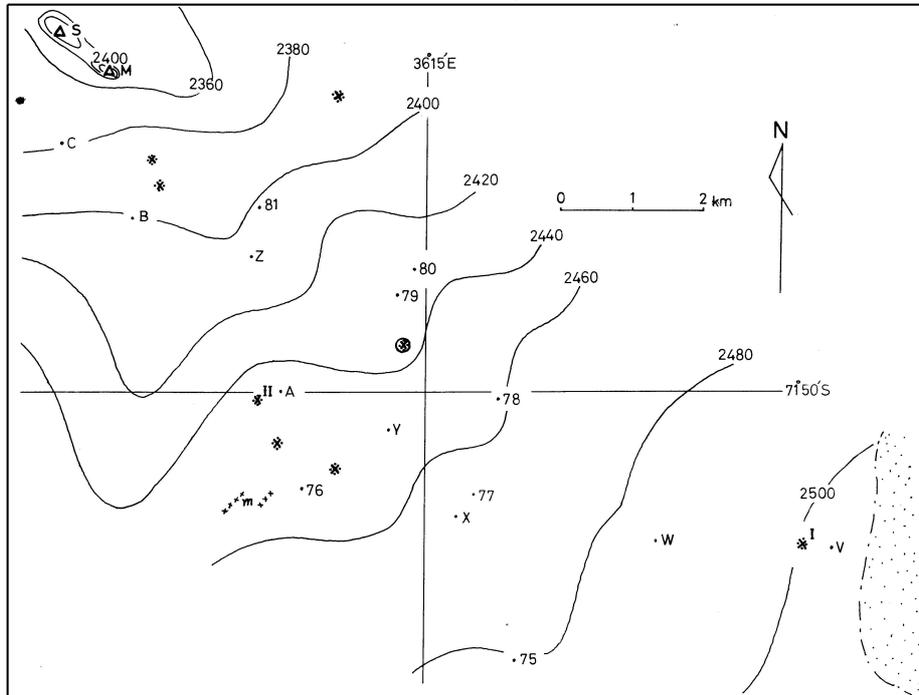


図1 隕石発見位置図 (Yoshida, 1971)

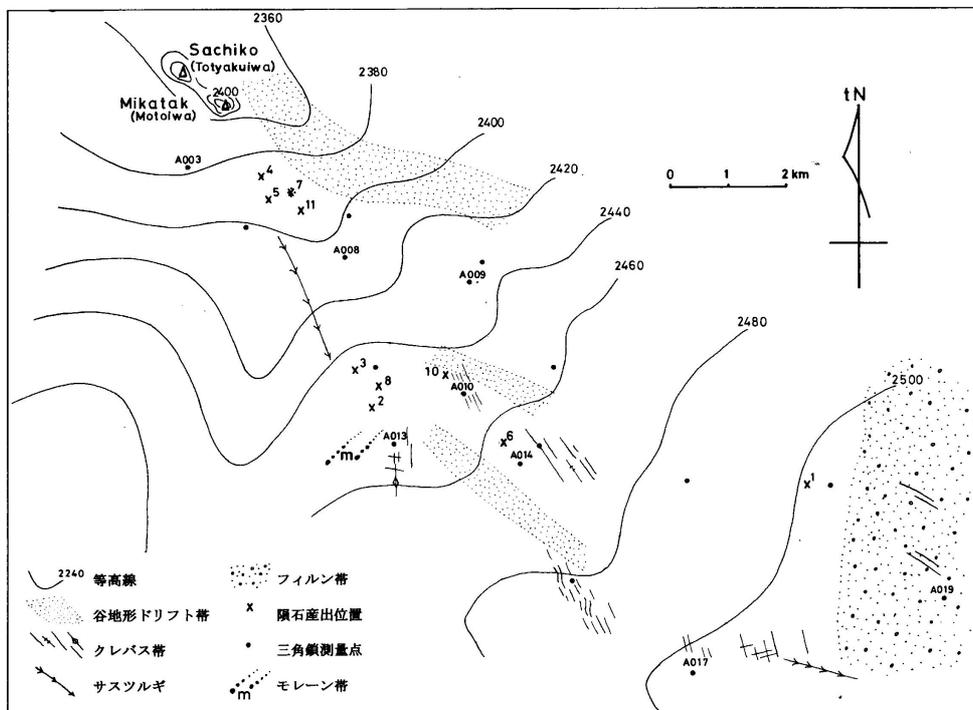


図2 隕石発見位置図 (吉田, 2003)

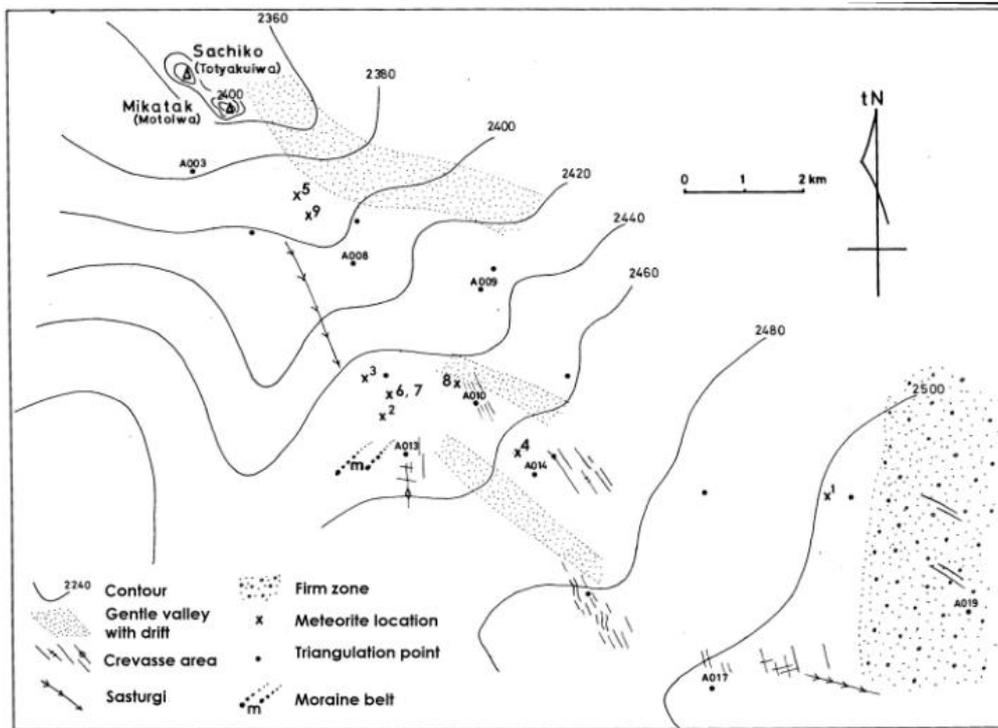


図3 隕石発見位置図 (Yoshida, 2010)

上田 (9日 01:47)

1 1 個か 9 個かの話ですが、先頭ナビ役の八木・上田の雪上車で見つけたのは 8 個です。最初に見つけた吉川・成瀬車の 1 個以外に見つけてなければ、もともと 9 個だったことになります。あのとき、ぼくと吉田さんが同乗することはありえなかったと思います。隕石発見に即して配置換えするような意識はなかったはずだし、それに加えて 2 重記載が起こるなど、考えられないと思います。

吉田 (9日 08:55)

2人以上でKD車に同乗して上田君も入れて測点探しかチェックに行ったことがあったような大変におぼろげな記憶を呼び戻しました。すくなくとも私が隕石を見つけたのはKD車からでした。一層たしかな事実を探るといことであれば、私と同乗していた安藤さんでしたかを含めて当時の内陸隊の皆さんの記憶や記録を集めて確認したいですね。

吉田 (9日13:34)

吉田 (2003) の資料 5 では明確にサンプルNos.2201と2202採集の記録があり、その場所はポイント 76 (A013)からAヌナターク (Mikatak)方向へ7.5 kmとなっています。しかし、上田君の記録で22日採集は歩測で500 m (資料7、No.3)の一個しか、22日には記載がないですね。当日と一緒にKDに乗った可能性があるかもしれませんが、いずれにしても以上のデータだけからすると、Yoshida (2010)の推定はやはり間違いで、吉田 (2003) 推定のように、”どこかで紛失した”とするのが妥当でしょうね。今後なにかの機会があったらばまたそのように書き直しましょう。

成瀬 (9日 16:41、一部加筆、表 1~4 を加えた)

この話題の一連のメールを見てはいましたが、リンク先とか出典資料をゆっくり読む余裕がなく、今まで傍観していました。

JARE10が採集した隕石が9個か11個かは、本当は重大な問題です。公式には、9個とされています。

しかし、その後の吉田のいろいろな報告では11個採集とすることが多く、S10ホームページに転載されている吉田著『南極やまと隕石初発見こぼれ話』(「地学教育と科学運動」誌、2003)では、”隕石消失ミステリー”という一節を設け、「B:南極~教育大の間で紛失した」可能性が最も高い、と

結論づけています。

一方、Yoshida (2010) の「Polar Science」誌に掲載したレビューは、原稿の段階で読む機会がありましたが、やはり'Mystery'というSectionがあり、気になりました。吉田さんにとってはmysteryなのでしょうが、第三者や読者にとってはいかにも”意味ありげ”に見えますが、おそらく単純なロギングミスか事務的ミスではないかと、私は思っています。その根拠の一つは以下の通りです。

1) 上田手書きによる「JARE-10隕石発見データ、(吉田、2003の資料5)」に、8個のメモが記載されている。

2) 成瀬フィールドノートおよび吉川記憶メモにより、吉川・成瀬組が採取したのは12月21日の1個のみである(Yamato-691と思われる)。

3) 吉田手書きによる「やまと山脈で採取した隕石メモ」には、aからiまでの9個が記載され、その内d,eはby Yoshidaと記されている。つまり、Ageta-3と-4の記載がない。

1)と2)は正しい。私の推理は、上田氏から-3,-4のサンプルを受けとった後、吉田氏が誤ってd,e (by Yoshida) とノートしたのであろう、ということです。それを後に集計してタイプ打ちの表(「こぼれ話」の表2)にすると、上田のNo.3とNo.4を加えたので、計11個となったのである。なお、その表2では、吉田採取(とされている)4,5番のみ、サンプル形状に関するメモがなく、空欄である。ご本人が採取したのなら、何らかのコメントを書きそうなものである。

当時は、測量作業が大詰めに差し掛かり、クレバス、地吹雪が多く、メンバー全員がやまと山脈到着=測量完結に向けて集中していたので、降って湧いた隕石には吉田さん(測量担当の1人だった)さえも十二分の注意を払う余裕はなく、採取直後に慎重な記載、記帳ができなかったことと思います。

幸いにも、Yoshida (2010) では、記録・記載ミスだったかもしれないことを認め、9個で決着しました(表4)。今後、新たな証拠や証言が現れるとは思えませんので、これが最終結論になるのではないのでしょうか。

表1. 吉田による隕石収集に関するまとめ、1969年12月に野外でまとめたものとされている(吉田, 003, 資料5) イタリック部分は今回の加筆・訂正部分

やまと山脈で採取した隕石のメモ

③ 69/22/01 10cm diam by Naruse
volc. bc-like
pan-cake-like film bear
V → W へ 300m 地帯

④ 69/22/02 3cm diam by Ageta
kema-like rock, by melted
film rounded
76 → Nunatak へ 800m

⑤ 69/22/03 5cm diam by Ageta
peridotite-like rock
76 → Nunatak へ 1.4km

なお、76 → Nunatak へ 200, 400 m の地帯
には clay, sd. bearing in reef が露出
している。

a 69/22/01 } 76-A 3+97 の内、7663754
c 69/22/02 } by Yoshida
(2301-A)
(2301-B)

f 69/22601 } Y. へ 1.2km 53° 51' N
? 02 } by Ageta (Ageta 6)

h 69/22603 } ~~76 → Y へ 500m~~
by Ageta (C-Y. へ 500m)

i ? (2901) by Ageta.

資料5 隕石採集まとめの表(1969年12月吉田のフィールド整理メモ)。細字は1970年7月に上田の表(資料7)を受け取ってから加筆されたもの。上田メモは帰国後1970年7月に吉田に届けられ、第2表のまとめに利用された。1970年8月原稿作成時(Yoshida et al., 1971)は、現実に存在する隕石の9個という数に合わせて、この表(本文表2=資料7)のNo.3とNo.4を削除して報告したことになる。

表2. 上田による隕石収集に関するまとめ、
1970年7月頃に吉田に送られたもの
(吉田, 2003の資料7)

番号	形状	発見日	発見場所	写真(No.)
1	33枚の黒い石	69.12.21	10-76の基点1方向に0.8km走った地点、基点1は10-76のC-Xに右方向より左に132°30'方向、最終測量点と等しいところ	
2	丸い石	同上	10-76の基点1方向に4km走った地点、この近所に斜面は基点1方向に急下りとなる。	77-パネル (CP1-77) モノクローム (023/1026)
3	黒い石	69.12.22	C-Xの約0.5km北方(歩測にF3)	
4	黒い石	69.12.23	10-76の基点2方向に3km走った後、C-X方向に4km走った。この地点よりC-Xまで4kmであった。安藤、吉田、上田の4人角集の頂集の途中(約)基点2前とC-Xの間は多少まがっているので距離は上記の値よりいくらか小さいはず。	
5,6	黒い石	69.12.26	図参照、5と6は互に1m位隔れていた。	
7	黒い石	同上	C-Yの北方0.5km地点	
8	黒い石	69.12.29	10-79より北面に3km走った北東に1kmいた地点 ★ C-X上での石はpureな裸石に 乗っていた。	

資料7 上田豊の隕石採集まとめの表(1970年7月23日)。

表3 隕石収集結果のまとめ (吉田 2003 の第2表)

第2表 1969年やまと隕石の収集結果. 1970年6~8月頃の吉田のまとめに加筆, 訂正. No. 1とNo. 3はそれぞれYoshida et al. (1971) のTable 1のNo. 1とNo. 2に対応する. 他のナンバーの対応は不明である.

Sample No. (diameter)	Reporter	Location	Characteristics of the sample (description by the reporter)
1. 69122101 (10 cm)	Naruse	300m from A018 to A016	Volcanic breccia-like, with pan-cake-like film
2. 69122102 (3 cm)	Ageta	800 m from A013 to Sachiko**	Carthaginian black rock; Hematite-like, rounded with melted film
3. 69122103 (5 cm)	Ageta	1.4 km from A013 to Sachiko**	Excrementitious rock; peridotite-like rock
4. 69122201	Yoshida	7.5 km from A013 to Mikatak**	
5. 69122202	Yoshida	Same as above	
6. 69122203	Ageta	500 m N*** from A014	Black rock
7. 69122301	Ageta	6.3 km from A013 to Mikatak* and turned toward A014 for 1.6 km	Black rock
8. 60122601	Ageta	About 1.5 km NW*** of A010	Black rock
9. 69122602	Ageta	Same as above, within 1m apart from 2601	Black rock
10. 69122603	Ageta	500 m N*** from A010	Black rock
11. 69122901	Ageta	3 km NW*** of A009 and then turned NE 1km	Black rock

* 野外で見つけたときの大体のサイズ.
** Sachiko : Mikatak は内陸旅行隊が測量基点の2つの巖岩に与えたニックネームで、その後公式にはそれぞれ御蔵岩 (ouchikurawa)及び基岩 (motoiwa)と命名された。
*** 北緯緯度 * ので 上田に与えた位置は西に40度ずれている。つまり北は北西40度となる

表4 最新訂正のやまと隕石収集結果のまとめ (Yoshida, 2010)

List of meteorite collection in Dec. 1969 (Partly modified from the list given by Yoshida et al., 1971 and Yoshida, 2003)			
Specimen No.	Reporter to Yoshida	Location description in the field (N is magnetic)	Field description by the collector. <i>Italic: description by Yoshida.</i>
1. 69122101	Naruse	300 m from A018 to A016.	<i>Volcanic breccia-like, with pan-cake-like film.</i>
2. 69122102	Ageta	800 m from A013 to Totyakuwa.	<i>Pomegranate-like black rock; hematite-like, rounded with melted film</i>
3. 69122103	Ageta	1.4 km from A013 to Totyakuwa.	<i>Feces-like rock; peridotite-like rock</i>
4. 69122201	Ageta	500 m north from A014	Black rock
5. 69122301	Yoshida, Ageta	6.3 km from A013 toward Motoiwa, and then 1.6 km toward A014. This is 7.4 km	Black rock
6. 69122601	Ageta	Ca 1.5 km northwest of A010.	Black rock
7. 69122602	Ageta	Ca 1.5 km northwest of A010, only 1 m apart from 2601.	Black rock
8. 69122603	Ageta	500 m north from A010	Black rock
9. 69122901	Ageta	3 km northwest of A009 and then turned toward northeast	Black rock

吉田(9日 21:25)(一部修正・加筆)

上田メモ(吉田, 2003の資料7)の12月23日ではNo4(第2表のNo.7)の発見場所について、安藤・吉田・上田によるA群南東部偵察行の帰路に隕石を採集したと記載している。一方吉田メモでは2201と2202(dとeで、第2表のNos4と5)の下に小さい括弧の中に2301-Aと2301-Bの書込みがある。これは当初2201および2202とナンバリングされ、後に23日だったと考え直されて2301-Aと2301-Bに変更されたことを窺わせる(イタリック部は原文を訂正)。また、上田2301の発見場所は吉田2201や2202と近く、Yoshida(2010)ではこのことから両者は一致すると推定し、上田と吉田と一緒に採取して、それぞれに採取記録をとったものを吉田が勘違いして別々のサンプルとしてまとめたことと推定した可能性があることと結論した。

以上で多分これまでの疑問の一部は解決しそうです。あと、また時間があり、さらにどなたかのいろいろな指適があればさらに解決していく可能性がありそうですね。

なお、成瀬君のいくつかの指適について私の即座の感じを書いておきます。

1. 彼の言うとおりに、当時は測量に極端に集中しており、とりわけ測量結果の集計責任のあった私は隕石採集に注意を集中する状況にはなかった。

2. ただし、吉田が岩質についてまったく記載していない故云々の彼の推定には異論がある。

当時の採集隕石に関する私の理解は、なにはともあれ拾えばほぼ隕石候補であり、なにはともあれそれらを集めればよい。また、その岩質は当初の3個(2101, 2102, 2103)については少し詳細に観察して記載したが、後のサンプルについてはどれも本質的に同様であり、とくに著しく違った岩相でないかぎりには殆ど観察も記載もしなかった。従って後日の第2表(表3)のまとめにあたっては、採集者の記載がそのまま記されている(表3, 4)。吉田(2003)でも述べたが、私は当時このように狭い地域なので、個々の隕石の拾得場所についてそれほど神経質になる必要はないと感じていた。そんなわけで、私の当時の隕石採集についての岩質や場所についての記録は全く不親切なものとなっている。

上田(10日03:19、原文から主要部を抽出した)

12/23は、ぼくのログノートでKC雪上車の距離計は約45キロ走っていて、1個の隕石を見つけています。吉田さんがKDに乗っていて隕石を見つけたという、記憶のとおりであれば、ぼくのKCの先導で、後続のKDに乗っていた吉田さんが、2個見つけた。つまり全部で11個だった可能性もあるわけです。その日付を12/23なのに、停滞日の12/22に間違えて記載したのでしょうか(越冬生活ではよくありますね)。ぼくの12/23のログノートには「ひきかえし点 ice mound 付近、クレバス帯でひやひやする」と書いてあるので、KD単独の行動ではなかったと思います。9個か11個かはミステリー以前のこのように思います。

成瀬(10日18:28)

吉田メール、上田メールを総合すると、かなり霧が晴れてきたようです。

以下、私の整理+推理です(以下、敬称略)。

1) 「吉田がKD車から隕石を拾いに降りたのはかなり確か」を認める。ただし、1個。

2) 12月23日、地吹雪のためC-Xに停滞。上田メモ(本文の表2)によると、「安藤、吉田、上田のA群南東部の偵察」とあるので、上田(KC14)先導、安藤・吉田(KD60)後続で、同一行動だったと思われる。偵察行の帰途、「黒い石」を拾得。同じサンプルを、上田メモ(表2)では4番(後に、表3ではNo.7)、吉田メモ(表1)ではd(69122201)と記載し(2301を書くべきところ、日付を間違えた)、メモの日付が違ったため、帰国後、同一サンプルを別物として表に記載した。両メモ記載の場所は、位置的に非常に近い。<以上は、かなり確かと考えられる>

3) 12月22日、地吹雪のためC-Xに停滞中、上田は徒歩で500m地点で、上田メモの3番(表3ではNo.6)を拾得。<以下は、推理>このサンプルを、上田は22日または23日に吉田へ渡した。吉田はこれを、dと一緒に吉田メモ(表1)にnoteし、e(69122202)と記載し(日付は正しい)だが、採取地点を正しく把握(確認)せず、dとeを大カッコでくくってしまった。メモの採取場所が違っていたため、帰国後、同一サンプルを別物として表に記載した。すなわち、吉田(2003)の第2表(本文の表3)のNo.5では、'Location: Same as above' となった。

以上、私の結論は、表3にて、No.4はNo.7と、No.5はNo.6と同一サンプルで、合計9個、となります。いかがでしょうか？

吉田 (11日 01:57、一部修正・加筆)

成瀬君の客観的な推論はなかなかうまくいっているように見えます。そこで(下の④の矛盾を解決したいと思って)昔の本箱をひっくり返したところ、やまと山脈フィールドノートがでてきたのだが、開いてみると12月30日以後の地質のことばかりで、測量中の記録をしたらろうノートはどうしても見つからない。想像は面白いが、なんとしても当時の記録がでてこないことには確認されたとはいえない。

しかしながら、差あたりは私も成瀬君の推論に沿って推定してみることにした。

まずどなたかが指適したように(多分成瀬君だったかな)、①私の手書きのまとめ表(1969年12月フィールド整理メモ、資料5)に上田君の2301がなく、1970年7月に上田君の隕石採集まとめの表(資料7)を受けて、上記吉田の表の2201(d)と2202(e)の下に括弧で2301-Aと2301-Bを書き加えてあることから、私の2201と2202は23日に採集したもので、上田君と一緒に採集したと理解したことを伺わせる。また、②私の12月フィールド整理メモに上田君の表(資料7)のNo.3(第2表のNo.6で、2203とナンバーされている)が記されていないことから、吉田の2201(No.4)は上田君の2203に対応することも考えられる。③そもそもフィールド整理メモで9個だったものが、11個であるはずがないとも考えられる。④但し、両者の地図上に記された位置はまったく違っていることは②の推定には不利である。

以上の推定は結論として成瀬君の推定と全く同じになっているようですね。なんのことはない、成瀬君の推論を私自身の言葉でサポートした結果になったと思います。ただし、最初に述べたように、以上はかなり確からしい推定ではあっても、100%事実だったかどうかは、私は自信がありません。

それにしても、上の推定はかなり確からしく、それではなぜ1970年から吉田(2003)までの数十年間、そのような推定ができず、11個としてきたのでしょうか。私は多分(推定するに)、最初に11個だと考えた1970年の南極資料論文まとめの段階(印刷段階では9個として報告)では、⑤1969年12月末に吉田がフィールド整理メモ(資料5)を作った後で上田君が「これもありました」といって私に2個の隕石を提供したのだらうというような理解をしたのではないかと思う。それを一旦信じ込んで、以後は成瀬君のような推定の方向を思いつかなかったのだらう。

それにしても成瀬君の推論は説得力がありますね。たしか上田君もそのように感じたようですね。これは実は、全体としては先にご紹介したYoshida(2010)の結論と合致するように私には思えますし、その確かさを補強したように思えます。1970年当時今回のような話し合いを関係者でやっていればとくにこのような結論に到達し、11個説はでて来なかった可能性が高いように思えますね。

ところで、彼の(3)は真に説得力があります。いかにも当時そのようだったように感じます。そうすると、上記の④の問題も解決するように感じます。

上田 (11日 12:33)

もともと9個残っていたものが、11個だったかという疑問がほぼ消えたというわけですね。

その混乱をまねいたミスがどうして起こったかという、個別的な過程が分ったという結末だけでは、さびしい。教訓として一般化するなら、フィールドで得たサンプルをリストアップするときには、紙上だけでなく、現場で現物を目の前にそろえ並べてするべきだということでしょうか。(そうすれば、9個が11個になることはありえなかった。)

―――あまりに正ロン風で、気はずかしいのですが。。。

成瀬 (11日18時)

私の推理に、皆さんから概ねご理解と賛意をいただきありがとうございます。

いつ、どこで、どう手違いがあったかは推察に過ぎず、100%の確定はありえませんが、状況証拠を積み重ねた結果、「二重登録した試料があり、採集した隕石は計9個」が最も確からしいと判断され、担当の吉田さんもこれに同意しました。

結局、本日未明の吉田さんのメールにあるように、Yoshida(2010)の結論("9個説")を検証し、それが妥当であると認定したことになります。そこで念のため、S10ホームページに掲載されている「講演記録2008年国際シンポ」を見てみたら、Slide-22の表(Yoshida, 2010 Table 2、本論の表4)では、「こぼれ話」の第2表(本論の表3)のNo.4、No.5が削除されて計9個、しかも69122301のReporter

が (Yoshida, Ageta) となっていました。これは、私が思っていた、望ましい記載です。

まとめ

以上をまとめると、結局成瀬によって Yoshida (2010)の結論が再確認され、さらに吉田の 11 個説発生の原因についての可能な推定やその原因となるような状況が当時の関係者らの中であったことが指摘された。これに関連して吉田は、吉田 (2003) の資料 5 と 7 の中に上記の結論と状況についての推論を支持する事実が読み取れると指摘した。以上、本論をまとめるに当り、成瀬簾二氏には原稿を読んで頂き、ご意見を頂いた。記して感謝したい。

引用文献

NASA, 2011, <http://www.nasa.gov/centers/johnson/home/wassonite.html>

Yoshida, M., Ando, H., Omoto, K., Naruse, R., Ageta, Y., 1971, Discovery of meteorites near Yamato Mountains, East Antarctica. *Antarctic Rec.*, 39, 62-63.

吉田勝, 2003, 南極やまと隕石初発見こぼれ話 (前) (後). *地学教育と科学運動* 42, 54-62, 43, 46-54.

Yoshida, M., 2010, Discovery of the Yamato Meteorites in 1969. *Polar Science*, 3, 272-284.

あとがき

ところで、その後もう一度資料 5 の原データを調べてみると、1969 年 12 月に野外で作られたというこの表に、1970 年 7 月ころに上田の資料 (資料 7) を受取ってから加筆されたのは、(2301-A, 2301-B) のほかに、2901(?) がある。このことは、吉田は資料 5 の表を作った 1969 年 12 月当時には、2901 隕石採集記録の存在を認識していなかったことを推定させる。同時に加筆された (2301-A, 2301-B) も併せて考えると、吉田 (2003, 2010) が記述し、成瀬もさらに詳しく指適したように (9 日 16:41; 10 日 18:28)、隕石採集作業当時には内陸隊の主任務であった測量事業の最終段階に皆集中していた時期であり、内陸隊全体を通じて隕石採集の記録作りが重要であり、正確でなければならないとの認識は無かったと言えるであろう。とりわけ採集隕石のまとめにあっていた吉田は、集めた隕石はすべて、そのまま失くさないように取りまとめて、牛来教授に“おみやげ”として渡すことが重要であるとの認識であり、それらの採集記録や発見場所などは全く重要でないとの認識だったのである。吉田 (2003) や Yoshida (2010) で明らかにされた採集隕石番号のつけ方、つまり「数個の隕石を繋いだガムテープにマジックで書いた」(Yoshida, 2010 の Fig.10)なども上記の吉田の認識程度を示しているであろう。

しかし、たとえある程度重要性を認識していたとしても、上田 (4 月 11 日 12:33) の言うように“リストアップは現場で現物をならべてする”というような作業ができるような状況ではなかったことは確かである。私にとって最も重要な任務であって、また興味を中心だったやまと山脈地質調査での採集標本についても、標本一覧表と標本現物の照合は帰国後ずっとたってからようやくできたのである。しかし、やまと隕石については、帰国後でも 1971 年の報告書作成時点ですでに隕石は私の手元を離れており、照合できる状況ではなかったのである。

2011 年 4 月 16 日